

## (西暦) 2017 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

身体接触を用いた会話中の2者間における心拍変動の同期現象と自律神経活動および主観的指標の変化に関する検討

学位の種類: 修士 (看護学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 16894604

氏名: 加藤 智史

(指導教員名: 習田 明裕 教授)

キーワード: 身体接触, 同期現象, 自律神経活動, 主観的指標, タッチング

目的: 本研究の目的は, 身体接触を用いた会話中の2者間における心拍変動の同期現象, 自律神経活動指標および主観的指標の変化を検討することである。

方法: 健康な18歳以上の男女を対象に, 準実験研究を実施した。同性かつ同年代であり, 初対面である対象者同士のペアを作成し, それぞれ介入群と対照群に振り分けた。実験課題として, 介入群は会話に加え, 身体接触を行った。対照群は会話のみを行った。介入群及び対照群の会話中の心拍変動, 自律神経活動指標を記録し, 会話前後で主観的指標を自記式質問紙で尋ねた。心拍変動については同期現象を検討するために相互相関解析を行った。自律神経活動指標は周波数解析を行った。主観的指標は対人コミュニケーションに対する認識, 会話相手への印象, 会話の評価などを尋ねた。全ての指標について群間・群内で比較検討を行った。

結果: 対象者は男性13名, 女性36名の計49名であり, 介入群23組, 対照群22組となった。対象者の属性として, 各群に有意差はなかった。心拍変動の同期現象については, 対照群と比較し, 介入群の方が1時点を除いて同期現象が促進された。しかし, 群間での有意差は見られなかった。自律神経活動指標については, 介入群の交感神経活動指標が対照群と比較して, 会話後半において有意に減少した ( $p=.049$ )。また, 対照群と比較し, 有意差はないものの介入群の副交感神経活動指標は会話後半において増加した。主観的指標は, 会話相手に身体接触することへの抵抗感および身体接触されることへの抵抗感が介入群の方が有意に減少し (それぞれ  $p=.001$ ,  $p<.001$ ), 会話中の快感情 ( $p=.02$ ), 相手への印象 ( $p=.048$ ), 身体接触の有効性 ( $p=.04$ ) に関して, 介入群の方が有意に高かった。加えて, 身体接触されることへの抵抗感と多くの項目に相関が見られた。

考察: 会話中に身体接触を用いることで, 心拍変動の同期現象が促進傾向を示し, 2者間の自律神経活動指標は緊張状態が緩和された。また, 主観的指標では抵抗感の減少や快感情の上昇などポジティブな変化をもたらした。加えて, “身体接触すること” への抵抗感と比較し, “身体接触されること” への抵抗感はその効果に影響を及ぼしている可能性がある。よって, 触れると同時に触られているという双方向性を意識した上で, 相手だけでなく, 自身が持つ身体接触に対する認識についてアセスメントをすることで, 身体接触がより有効な情報伝達的手段として活用できることが示唆された。